

ローマ人への手紙第八二回質問

八・一「こういうわけで、今や、キリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。」

(ロマ八章一節／新改訳2017)

(問一) クリスチャンは、「キリストにある者」です。キリストにあるとは、どういう特権を与えられている者であるか、詳しく説明して下さい。

(問二) 第二コリント五章一〇節のさばきは、誰に対し、どんな種類のさばきですか。

「私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければなりません。」(Ⅱコリ5・10／新改訳2017)



神の宣言

(ロマ八章一節)

ここで言われていることがどういうことであるのかということがわかると、もう少し違った生き方をすることができ

はずです。ここで言われていることは、それほど重大な内容を持っていてのことです。七章一四―二五節においては、生まれ変わったクリスチャンと言えども、うちにある罪のために、みじめな敗北を繰り返し、悩みが多いことを述べましたが、しかし、キリスト・イエスと結びつけられている今、断罪されるのが絶対にならない者として神に認められているという事実を知ることが、なんと大きな慰めでしょうか。

ところが、ある人々は、「わたしは断罪されるように思えてなりません。まだ罪を犯すのですから」と言うかもしれません。しかし、自分がどのように思うかということは、最後の日、神の御前に立った時には、全然問題ではありません。神が何と言っておられるかということが重要なのです。神は、罪のために十字架上で死に、死人の中からよみがえられたキリストにある者として、わたしたちを見てくださいます。そして、もはや断罪しないと宣言しておられます。

わたしたち罪人は、ちょうど法廷に引き出された囚人のような者です。いつも自分の罪のためにビクビクしていなければなりません。ところが、裁判官は、最後に判決を下す時、無罪と宣告しました。全く自分の耳を疑うような事態が起こったのです。自分が今までしてきたことを思えば、無罪などという判決の下るわけがないと思うでしょう。確かにそうです。ちょうどそれと同じように、わたしたちが自分の状態をよく知っていればいるほど、神が義と認めてくださり、絶対に断罪しないと仰せられても、自分の耳を疑うばかりです。しかし、わたしたちの場合、イエス・キリストがわたしたち

の身代わりに罪の刑罰を受け、死という値を支払ってくださったのです。ですから、神はわたしたちを罪に定めることはない¹と仰せられるわけです。

ですから、わたしたちにとって大切なことは、自分自身の状態や感情に目を向けてはなりません。わたしたちの身代わりに死に、そしてよみがえってくださったイエス・キリストに目を向けることです。その時、わたしたちは、ひとたびわたしの罪のために死なれ、そして死人の中からよみがえり、今、父なる神の右に着座しておられるイエス・キリストの中に自分自身を見いだすことができるでしょう。もしもキリストの聖い贖いによって、わたしたちの罪の問題が解決していなかったとしたら、キリストは父なる神の右には着座しておられなかったでしょう。キリストが今そこにおられ、わたしがキリストにある者として神が認めていてくださるという²ことは、わたしが神のさばきから解放されたことを、十分証拠立ててはいないでしょうか。

クリスチャンとは、キリストにある者です。キリストにある者とは、キリストと結びつけられた者であり、キリストの持つておられるものにすべてあずかることができるということです。キリストとともに古い人に死に、キリストとともに新しい人に生き、そして今キリストとともに天に着座させて³いただいている者です。キリストとともに今天に着座しているとは、どういうことでしょうか。天とは神の御座であり、悪魔の近づくことのできない所です。ここ以上に安全な所はありません。そのことを考えてみただけでも、クリスチャン

の立場の安全なこと、また確かなことがわかります。

わたしたちクリスチャンは、「キリスト・イエスにある者」です。わたしたちクリスチャンが神の御前に引き出される時、いつも「キリスト・イエスにある者」として引き出されるのですから、さばきの問題は永遠に解決されているわけです。

ですから、さばきの恐ろしさを考える必要は毛頭ありません。そういうわけで、クリスチャンにとっては、死もまた恐ろしくなくなるのです。死が人々にとって恐ろしいのは、死そのものというよりも、死のかなたにある神のさばきに対する不安であり、恐れです。自分は死後さばかれるのではないか、そしてそのさばきによって地獄へ落とされるのではないかという不安です。もちろん、生きている人間にとって、だれひとりとして死を経験した者はありませんから、死の不気味さということについては、いかんともなしえません。しかし、死のかなたに、もはやさばきは待ち受けていないのだということがわかったら、死に対する恐れや不安はなくなるはずで、す。多くの人々はその点で失敗し、死を恐れています。

しかし、クリスチャンにとっては、死後のさばきは絶対がないのですから、このことが本当によくわかれば、心はどんなに軽くなり、慰めと力と幸福に溢れるでしょうか。もちろん、クリスチャンも死後さばきを受けることがないわけではありません。しかし、それは滅びに至るさばきではなく、信仰を持ってからのち、主から預けられた賜物をどれだけ忠実に主のために用いたかということについての評価がなされるさばきです。ですから、それについては、「報い」が与えら

れるだけです。パウロが別の手紙で次のように言っているのがそれです。

「なぜなら、私たちはみな、キリストのさばきの座に現われて、善であれ悪であれ、各自その肉体にあつてした行為に⁽²⁾応じて報いを受けることになるからです。」

そして、このことは、主がタラントの譬で語っておられることでもあります。⁽³⁾ですから、このことと、滅びに至る最後のさばきとは、はっきり区別しなければなりません。

クリスチャンは、最後の滅びに至るさばきを受けることがないので。それがここで言われていることです。「こういうわけで、今はキリスト・イエスにある者は、絶対に断罪されることは⁽⁴⁾ない。」それは、「断罪される」と訳されたことがはっきりと表わしております。

このことがわかると、クリスチャンは自分がいかに自由にされたかということがわかります。そうすると、神のさばきをのがれるためではなく、このすばらしい救いをわたしのために用意してくださったキリストに対する感謝と愛が湧然と心の底から湧いてきますし、神を喜ばせたいという願いが同時に湧いてくるのです。ですから、逆に言うと、主を心からお喜ばせたいという願いを持っていない人、主のために、またその教会のために心から奉仕したいという願いのない人は、このことがわかっていないと言ってもいいでしょう。そういう人は、大抵自分を見つめています。自分を見つめて、「自分は汚れている、罪を繰り返してばかりいる、わたしはなんとというみじめな人間なのだろう」と嘆いてばかりいて、

前進が少しもありません。あたかもエレベーターのように、上ったり下ったりしている信仰です。しかし、大切なことは、信仰とは自分を見つめて生きるのではなく、自分のために十字架について死に、三日目に死人の中からよみがえり、今日の父なる神の右に着座しておられるイエス・キリストを仰ぐことです。そこに自分もともにいるということを知ることです。神はイエス・キリストにある者として、わたしたちを見てください。イエス・キリストは罪の支払うべき値をすべて支払ってくださいましたので、そのようにわたしたちを見てくださいます。ですから、「今はキリスト・イエスにある者は、絶対に断罪されることはない」のです。これは、神の宣言です。

注(1)エペソ教会への手紙二章六節。

(2)コリント教会への第二の手紙五章一〇節 新改訳。

(3)マタイによる福音書二五章一四―三〇節。

(4)「断罪」(八・一)と訳されたことばは、原語のギリシャ語では、カタクリマ (*katákrima*) ということばが使われています。これは有罪の判決を意味します。

尾山令仁・ローマ教会への手紙講解(ロイドジョンズロマ書講解要約)より

